

エジネーのオーラルヒストリー (3) ソルマージャブ (上)

ナムラ・サランゲレル・児玉香菜子

このテキスト¹は中国内モンゴル自治区アラシャー (阿拉善) 盟エジネー² (額濟納) 旗出身、現在アラシャー盟人民政府所在地バヤンホト市在住のソルマージャブさんのオーラルヒストリーである。語りはソルマージャブさんの祖父にはじまり、養父母と自身の生涯と、一世紀にわたるとともに、言及される地域と経験も実に多岐にわたる。祖父のこと、養父のモンゴル国における教育経験、地域と国境を越えて移動する生活、婿入り、国民党時代に旗代表として蒋介石と面会していたこと。さらに、自身の幼い頃の生活、中国共産党が中華人民共和国を成立させてからの生活とその変化など。なかでも、文化大革命中にこうむった迫害によって、ソルマージャブさんは「青春時代」を刑務所と労働改造所 (強制労働キャンプ) で過ごすことになる。ソルマージャブさんがいかにして無実の罪をきせられたのか。刑務所と労働改造所での苦難はどのようなものであったか。その無実の罪をどのように晴らそうとしたのか。共産党成立以前から学校に通い、高等教育を受けた若者が、知識人として社会に出たのち、刑務所と労働改造所で十数年間を罪人としてすごした一生は、20世紀の中国国境に暮らす少数民族地域の社会史でもあるといえよう。

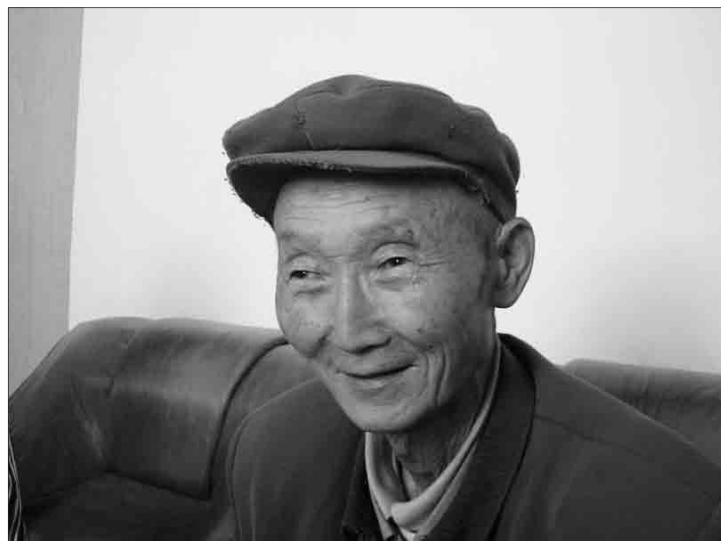


写真1 ソルマージャブさん (2005年5月撮影)

1 本テキストはサランゲレル、アラタンツェツェグ、児玉により採録されたものである。言語はモンゴル語である。採録されたものをサランゲレルがモンゴル文字で書き起こし、それをナムラが翻訳し、ナムラと児玉が確認した。

2 本テキストのモンゴル語表記はエジネー旗の方言に準じる。

ソルマージャブ老人は 1934 年に生まれです。エジネー旗で有名な知識人です。

——わたしたちに自分のオーラルヒストリー、両親、兄弟親戚、過去について話してくれませんか。

わたしのオーラルヒストリーはたいしたものではありませんよ。わたしは他家で育てられた子供です。3 歳のときに他家に養子にとられました。わたしの養父はとても裕福な家でした。馬群もありました。ハルハのアルハンガイから、上の世代の時に馬群を追って、移住してきたと言っていました。

——馬群は多くいましたか？

馬群と言えども 40 余頭のウマがいました。わたしの幼い頃のことです。父が団長になっていた時のことです。ヒツジとヤギは 500 頭余り、ウマは 40 余頭、ウシは 60, 70 頭、ラクダは 50, 60 頭近くいました。そして、召使もいました。わたしの母とわたしは家で一緒に仕事をしていましたよ。雇った人もいました。わたしの父は家に寄っていくだけで、家にそんなに長くいたことはありません。何日間も家に帰りません。ノイン³の秘書でした。国民党の士官でした。それで、わたしの母は主に家のことを取り仕切っていました。そして、当時に我が家がどこにあったかと言うと、バヤンボグダの近く、その旧跡にあったそうです。わたしの生家と養母は近くに住んでいました。日中、放牧すると、家畜が合流してしまうくらい近くでした。

——あなたの実母は、あなたが 9 歳の時に亡くなったので、今話していたのは継母ですか？

そうです。のちの養母です。わたしが 9 歳の時に亡くなったのは 1 番目の養母です。2 番目の養母の名前はトホトホといいます。今は日本にいます。この 2 番目の養母はわたしよりわずか 7 歳年上の人でした。彼女は辰年で、わたしは亥年で、7 歳年上です。わたしの 1 人目の養母も辰年でした。1 人目の養母は 2 人目の養母より 13 歳年上でしたよ。2 人目の養母は 1 人目の養母が 13 歳の辰年に生まれましたよ。2 人の養母は皆辰年でした。1 人目の養母は 13 歳年上の辰年で、2 人目の養母は 13 歳年下の辰年です。わたしの 2 人目の母は、わたしの父と暮らしてから、息子と娘の 2 人を養子に取りました。その娘と婿は今皆日本にいます。2 人目の養母は娘と婿の 2 人について日本にいます。息子は今一人で臨河にいます。息子の名前はウーディと言います。80 年代に一人の女性と付き合っていました。それ以降は妻を娶ることなく、一人者です。今はもう老人になり、40 歳を過ぎたでしょう。45, 6 歳になったでしょう。わたしは 1 回行って会いました。元気でした。老けて、髭が伸びていました。彼は子年の人で、子、牛、寅、卯、辰、巳、馬、未、申、酉です。今年 (2005) は酉年ですよね、37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46 歳でしょう。ウーディはわたしの弟になります。わた

³ ノインは貴族の意。

しの2人目の養母トクホトの養子ですから。わたしの2番目の養母から子供が生まれませんでした。2人の子供を養子に取りました。一人はわたしが今話したウーディです。息子と娘の2人を養子に取りました。娘はナランツェツェグと言い、今日本にいます。マンドホツェツェグ先生の実妹のナランツェツェグと言います。そうです。これらは皆親戚と言ってよいでしょう。ウーディはシャラグチンから養子にした息子ですよ。わたしの妹から養子に取った子供です。シャラグチンはわたしの妹です。ナランツェツェグを、自分の兄の娘を、わたしの養母は養子にもらいましたよ。兄からもらいましたよ。ナランツェツェグの夫はチョクトと言います。2人とも日本にいます。

—あなたは今盟（人民政府所在地）に住んでいますか？いつ戻りますか？

わたしは盟にいます。故郷（エジネー旗—筆者注）に来ましたのでしばらく住んでいます。わたしは遅れて結婚した人です。52歳で結婚し、53歳で父親になりました。盟で暮らしています。しかし、そこには知り合いがおらず、訪ねていくところもなく、話し相手も見つかりません。それで暮らすことができません。ずっと家にいます。妻と子供たちの召使になり、家の掃除、水や薪の運搬、そのような仕事をしています。わたしの妻は退職してくれず、朝、仕事に行ってしまう。子供たちも学校に行きます。それでわたしは毎日床を掃き、ゴミを捨て、休みもなく、経も読まず、読む本もありません。つまらないです。やはり、ここ故郷の方がよいです。

—どうしてそんなに遅く結婚しましたか？

文化大革命で12年間労働改造（強制労働キャンプ）に行き、刑務所にいたからです。わたしのオーラルヒストリーを聞いたら、一つ大きなものになりますよ。語り尽くせません。青春時代を刑務所で過ごしました。本当に青春時代を刑務所の中で失いました。なぜ刑務所に入ったかという、さまざまな事情があります。わたしは学校教育を受け、かなりの知識人の一人でした。それで、人々はとても嫉妬していたようです。それで、文化大革命という一つのチャンスがやってきた時、わたしを陥れて抑えたかった人々は、無実の罪を着せて摘発し、害しましたよ。

—あなたの養父はアルハンガイにいましたか？

いいえ。チェチュエルリグ・マンダル県（アルハンガイの県所在地）にいたようです。その地名はナーダムなどにも出ていますよ。解放後もチェチュエルリグ・マンダル県というところがあります。今のアルハンガイでしょう。当時は旧チチン・ハン県だったか、どこだったのでしょうか。チェチュエルリグ・マンダル県に入り、旗（政府所在地）に住んでいました。そして、ハルハが解放されたので、子供たちを強制的に学校に通わせます。男の子を小学校に強制的に連れて行きました。それで、学校に入り、学生として集められ、行ってしまいます。現在もトルゴード人がいると言われています。あなたたち

はいたらいで、問題ありません、あなたたちに課税しないし、徴兵もせず、トルゴードの家庭なら軍隊に行かせません。あなたたちは住みたいなら住みなさい。自分の意思で移住したいなら行ってもよいです。しかし、学校に惹かれて、子供たちを学校に通わせたので仕方なく、残りました。わたしの養父の母の名前を何というか知りませんが、養父はホンジャという人でした。ホンジャ・トルゴードと言ったそうです。つまり、わたしの父の父（祖父）はホンジャという人です。わたしの養父の話によると、父と母ともう一人の妹がいたそうです。ハルハと一緒にいったそうです。養父の家はそのようだったそうです。そして、わたしのその父を学校に通わせました。当時のハルハの学校は革命学校で、新しい社会になった革命の時代です。その子供たちを、小学生の子供たちを、1回連れて行ったら、家に帰らせないそうです。両親が来て会うしかありません。一度学校に入ると、両親は学校の近くに移住し、養父は多くの子供たちがいるところに行き、暮らしました。ロシア人の先生がいました。ブリヤート人の先生たちも来て教えていました。その学校は新しい制度で建てられ、蓄音器もありました。またロシア人とブリヤート人の医者もいたそうです。病気にかかったら治療する医者がいたそうです。皆、ロシアから派遣され、持ってきたものです。そして、1回入ったら出られません。そのように過ごし、6年になりましたよ。母も6年過ごしました。わたしのこの養父はとても頭が良く、優れた子でしたよ。成績がとてもよかったです。それでどうするかというと、この子をウランバートルに連れて行きます。ウランバートルに連れて行き、中学校に通わせます。当時、中学校に入ると、続けて重点的な養成対象者の一人になります。子供をウランバートルに連れて行かれたら、出てくることはとても難しくなります。これは1930年代のことです。1935、36年のことか、34、35年のことでしょうか。やはり一緒にいったそうです。ダムビジの時期に含まれて行ったのか、他の時期に含まれて行ったのか、やはりハルハの家族と一緒にいったのでしょうか。そして、学校に通い、5年になったそうです。丸5年たってから卒業させました。卒業した後に賞を受け、秋になるとウランバートルに行き、ウランバートルに行けば、順調に行けば、一部をロシアに連れて行き勉強させます。ロシアに連れて行ったらどうするかというと、党や政府の主力メンバー、党や政府をリードする幹部として養成するそうです。または士官として養成するそうです。そして公安、さらに新聞記者、教員、医師、獣医など、このように多くの専門の中から一つを学ばせ、モンゴルの各部門の若者を養成する目的があったそうです。ロシアはモンゴルをそのように多くの面で助けていましたよ。

「あなたは良く学び、試験ではとても良い成績を取りました」

と報奨を与えました。思うに、おそらく小学校で成績がトップだったのでしょ。勉強していたときに、あなたはとても希望がある子だと大きく褒めて、学期毎に試験を行っていたそうです。毎年試験してどのぐらいの点数を取っていたか。トップや2番目に入ったら、たくさんの飴と衣服を褒美に与えていたそうです。それで励まされて、父は勉強に励みました。そうしたら、すでに調書を用意していました。この子を、目標を持って育て、重点的に育てます。勉強を支えていたのはブリヤート人の

先生たちでした。ロシアのブリヤート人たちが来て教えていたそうです。バイガル湖のブリヤート人の先生たちだそうです。ハルハ人ではありません。皆ロシアの派遣で来ていた人々です。皆ブリヤート人の先生たちだったそうです。写真と調書を準備し、

「今は小学校が休みになりました。あなたは家に帰り、戻ってきなさい」と言われたそうです。

「家に帰った後、8月のいついつに、あなたはウマに乗ってきなさい。両親に『ウランバートルの学校に行きます』と言ってから来なさい。休みがなくても問題ではありません。成績が良ければ続けてモスクワに連れて行きます。ロシアに連れて行って勉強させます。将来、あなたはとても才能を持った素晴らしい人になり、出世しますよ。将来性がある、将来性があります」と言ってくれたそうです。漢語で言うと「前途がある」ということですよ。そして、賞を与え、調書を作成し、写真を撮り、調書を準備し、このようにすべてがもう決まっていたそうです。それで、上級へ報告するように準備していました。「あなたは帰って、いついつ来て」と行かせたそうです。それで、家に帰ってきて、両親にすべてを話したようです。話したら、両親は同意しませんでした。話してすぐ、翌日の夜に家の半分を運び、馬群を追って移住して出てきました。家の半分を持ち、小家畜を捨て、一部の馬群と家の荷物の半分を持って、急ぎあわてて、移動し、マーゾンに出てきましたよ。

夜中に移動し、マーゾンに来て、その辺りにいました。本来の故郷であるホブグサイルには移動しませんでした。そのような状況が長く続かないうちに、両親が次々に亡くなりました。これは養父が自分で語ったことです。わたしの父には自分の記録帳があります。自分の一生の記録がありました。文化大革命の時に豊かなノインの階級に分類され、その記録帳も没収されて、どうなったか分からないまま、なくなりました。父がわたしに1回見せたことがあります。緑のこのような本にすべて書かれていました。幼い頃のこと、一生分のオーラルヒストリーのようなものが書かれていました。わたしはいつ、どのようにしていたなどを書いていました。マーゾンに来て、そこにいるときに、1930年代にハルハ人たちがここに入ってきました。ハルハ人たちと一緒にいる間に、両親は亡くなりました。一人になったので、家の主になりました。当時、17,18歳か18,19歳になった若者でした。責任を取れる人になっていました。両親が次々と亡くなり、家では妹と2人だけになったそうです。妹は家々の召使になっていました。ハルハから来るとき、地元から2つの馬群を追ってきただけで、小家畜はありませんでした。それで、妹は家ですることがないので、家々の召使になっていました。裕福な家について行き、「おまえは我が家にいなさい、我が家にいなさい」と召使をし、後に一人のハルハの若者と知り合いました。その若者と一緒に家々を回っていました。兄には、何か言う人もなく、自分の好きなように暮らしていました。好きなときに馬群を放牧します。気が乗らないときは、他人の家に遊びに行ってしまう、たまに1回、馬群を見に行くだけでした。しばらくして、どこからか知

らないがハルハ人たちがやってきて、モンゴル人の家族を集めていました。その集めるときに、妹は召し使われていた家族と一緒に2回もハルハに収容されました。

わたしの父もマーゾンに住まなくなりました。そこからさらに新疆のホボグの近くで、ホボグの手前です。トルゴード人の家族について、ホボグに戻るつもりだったそうです。しかし、ホボグにつかず、ホボグの手前の新疆のどこでしょうか。バルクルにいたのか、どこにいたのか。そのあたりにいました。さらにホボグの方へゆっくり移動していました。本来の故郷に戻りつもりでいました。そこにいたとき、前世のエジェー・ラマの故郷の一人のラマが来たそうです。ヨンドンというか何とつか。このラマの名前を忘れました。それで、そのラマと会ったそうです。この人は、今のエジェー・ラマと同郷です。

わたしの父のおじはとても厳しい人だったそうです。わたしの父の両親がなくなった後、おじが面倒をみるとしていただいたそうです。おじは甥の家と家畜の面倒を見て、今後はどのような家庭にするかをわたしが責任をとり、この家族の跡継ぎを復活させる人になると、おじがやってきて横取りしたそうです。わたしの父はこのおじと折り合いがよくありませんでした。理由なく叱っていたので、両者の間に対立が生じていました。そうしているうちに、馬群も少しずつなくなってしまいました。徐々に失くして、全くなくなりました。両親が亡くなり、妹がハルハに行き、後ろ盾はおじだけでした。おじと折り合いが悪かったです。それで、故郷のホボグに行くつもりで新疆のどこかに着いていたそうです。そのような状況でした。その際に、そのラマに会い、この状況を、わたしはこのようだと、そのラマに話したそうです。そのラマはホブグサイルから、新疆から来た人でした。精河県というボグダ・エレン・ハビルガのジンギーン・バイル旗のラマだったそうです。オデー（五台山）に行くคนเดียวで来たそうです。そのラマはトルゴード（ホブグサイル）にいたが、ここに来て、どんなところがあるだろうかとマーゾンを目指したそうです。そうしたら、わたしの父もラマに

「じゃあ、わたしもあなたと行こう」

と言ったそうです。そのラマは、

「あなたは自分で決めてください。あなたは单身ですから。行くか行かないか自分で決めてください。あなたのおじは何と言うかな」

と言ったそうです。そしたら、わたしの父は

「じゃあ、わたしは自分で決めます。おじが同意するかどうか、関係ありません。あなたが行くところはどこでもわたしはついていきます。わたしはこのおじと一緒に居たくありません。この厳しいおじとわたしは合いません。おじに決めさせたくありません。わたしは自分で決めます」

と言いました。

そのおじの名前を、わたしの父は言わないものでした。そのようなおじがいたと話していたことが記憶に残っています。その名前が記録帳に書かれてあったかどうか、覚えていません。わたしの父は

話していましたし、わたしはその記録帳を読んでいました。しかし、幼い頃の状況についてはあまり気にしていませんでした。主にハルハにいたこと、トゥブシンバヤルについて南京に行ったことなどが書かれていました。当時のわたしは、そのようなことには興味を持っていましたが、幼い頃のことにはあまり興味ありませんでした。その記録帳には自分のおじの名前が書いてあったはずですが。

それで、そのヨンドンというラマが話したそうです。

「わたしはエジネーのトルゴード・バイラ旗、トルゴードの旗と言われているところに行きました。そのエジネー・トルゴード旗のエジェー・ラマという活仏は我が新疆の旗のボグド・エレン・ハピルガの人です。ついていく家族には何世帯かの家族をあげました。その家族についていろいろ話してくれました。エジェー・ラマがそこに着くと、旗全体がトルゴード人なので、そのトルゴードのラマは我が旗の人です。エジェー・ラマに謁見し、我が旗からも数世帯がついて行きました。わたしは、あなたをそのラマに会わせてあげます。あなたは彼を頼れば、頼りになります。そこにはあなたに対しておじのようにする人はいません。あなたは俗人ですから、後にラマになるか、ならないかは別のことです。そのラマにつき従っている家族にあなたを案内します。そこにはこんな人たちがいます」

と言ったそうです。そうしたら、わたしの父は

「だったらそうしましょう」

と言い、父はそのラマに付いて、ここに戻ってきました。そのラマを連れて、こちらに向かい、このローツォから入ってきたそうです。ローツォはマーゾンから出て、このゴビに来て、このように入ってきたそうです。

何年に入ってきたのでしょうか。1940年代初頭でしょうか。いいえ、30年代でしょうか。30年代末でしょうか。30年代の初頭に来たのでしょうか。それは違います。そのダミビジの時代に来たのではありません。年があいませぬ。ともあれ、父はトゥブシンバヤル・ノインの警備隊に入りました。トゥブシンバヤルの警備隊にいましたが、後に秘書になりました。トゥブシンバヤルのときから、わたしの父は秘書になりました。来てローチョと2人でトゥブシンバヤルの警備隊に入りました。ですから、1934,35年頃に入ってきたでしょう。トゥブシンバヤルは1938年に亡くなりましたよね。それより前のはずです。

やはりハルハに徴集されて入ったそうです。どんな時期にマーゾンからハルハに徴集され、再びいつに出てきたのか。何回も徴集され、何回も出てきました。いったい何回目に入ったときでしょうか。それらのうちの1回であるはずですが。年があっているのは、トゥブシンバヤルが存命中に入ったことです。父はトゥブシンバヤルに何年間ついて、亡くなるまで秘書だったそうです。トゥブシンバヤルが死ぬときにもついて行ったそうです。ついて行って、2人でいて、トゥブシンバヤルが亡くなったそうです。ルハワーンジャブについて、蘭州に着き、ルハワーンジャブは將軍になったそうです。そ

れらは全部記録帳にあります。そのガワーの記録帳にも「(父がこれらのことを) 自分で言った」と書いていました。そのガワーの記録はそのままあります。父が戻ってくるときに、この人はとても知識がある人ですよ。ハルハで学校に通っていた学問がある人で、当時としてはとても知識があり、賢い知識のある人でしたよ。それで、政府に連れて行き、トゥブシンバヤル・ノインの警備員になったそうです。カーというのは漢語で警備員ですよ。今で言う、ボディガードです。トゥブシンバヤルが1938年に亡くなるときに、政府の秘書になりました。

政府の秘書になって、寺院に來たあと、どうしたかということ、この家に婿入りしました。わたしの1番目の養母だそうです。この家に婿入りしたそうです。この家族にはホニチ⁴・ボイという人がいて、家主のヒツジの放牧人です。アギのヒツジを放牧し、サンジェ・ノイン⁵のヒツジを放牧して、家畜を殖やし、ゴチン・トルゴード⁶のヒツジの放牧人で、ゴチン・トルゴート・ホニチ・ボイと呼ばれるようになりました。当初はそんなに財産を持っている人ではありませんでしたが、一生、若い頃から年取るまで、サンジェ・ノインのヒツジを放牧し、ヒツジをたくさん殖やしてあげ、それでホニチ・ボイという名前になりました。サンジェ・ノインのヒツジを放牧し殖やし、何年召し使われていたでしょうか。貧乏だけれど、よい人だと、ホニチ・ボイに家を建てあげ、嫁を取ってあげ、解放したそうです。

「今後は、おまえを搾乳やヒツジの放牧に召使わない。どんな仕事にもあなたを使いません」と、サンジェ・ノインはホニチ・ボイを独立させたそうです。このホニチ・ボイには5人の子供がいました。息子2人と娘3人がいる人でした。ホニチ・ボイは2人の息子を全部ラマにさせました。3人の娘がいました。3人の娘の一人が、他の男と一緒にになっていて、家で一人の子供を産みました。生まれた子供はナンジドですよ。2番目の娘も嫁に出しました。一番下の娘がわたしを養子に取った人です。わたしの養母はこの一番下の娘です。嫁にいかずに、家にいた人でした。一番の娘が家を出産した後、分家して独立させ、一番下の娘と一緒に暮らしていて、一番下の娘に跡継ぎの婿をもらうつもりでいました。そうしているうちに、ホニチ・ボイは亡くなりました。それで、母と一番下の娘だけで暮らすようになりました。この母は、つまりわたしの父の養母です。この母は、娘に婿を取ろうと家にいますよね。年上の娘が出産した後、分家して、そばに独立させました。2番目の娘を嫁に出しました。母は年下の娘と一緒に暮らす、たくさんの財産を持つ老人でしたよ。この老人(わたしの養母の母)の妹として、もう一人の老人がいました。その妹の夫はチンダル・ジャランという人でした。チンダル・ジャランはこのホニチ・ボイの妹夫だったようです。彼は老人(養母の母)の妹を嫁にしました。彼とホニチ・ボイの二人は婿同士ですよ。このチンダル・ジャランと2人は、チンダ

4 ホニチはヒツジ放牧人の意。

5 前述のアギとはサンジェ・ノインの尊称。

6 最初にエジネーに來たトルゴートの末裔の意。

ルは章京⁷だったか、官吏だったようです。姉妹の夫同士ですから、親戚になります。前代のエジネー・ラマと、わたしたちのホンジャ・トルゴードのホボグ・サイルから来た、ホンジャ・トルゴードのこの子を、この家に婿入れしましょうと相談していました。それで、婿に取ったそうです。わたしを養子に取った養母の夫ですよ。この家族の一番年下の娘が跡を継いで、わたしの父を、ホニチ・ボイの後継者にしようと婿にとりましました。この人をホニチ・ボイの婿にして、家で生まれた息子のナンジドを連れて行き、2人の（母方の）おじがいるでしょう、ホニチ・ボイの2人の息子、ジゲムド・センゲとロブズンダルジャという2人に（ナンジドを）あげます。この2人のおじも裕福なラマでしたよ。とても裕福でした。ウシの群れを持ち、人を雇っていました。この裕福なラマに弟子入れさせ、おじの後継者にさせます。草原の財産をわたしの父に相続させます。このように決めました。後に、何年たっても子供が生まれませんので、わたしの妹を養女に取り、その後わたしを養子に取りました。わたしの養母と養父は同い年でした。わたしが9歳のとき、養母が亡くなりました。わたしの父はノインの警備員になり、トゥブシンバヤル・ノインを連れ、グンブン（塔爾）寺で治療させていましたが、ノインは亡くなりました。トゥブシンバヤル・ノインを葬りました。トゥブシンバヤル・ノインを葬るとき、弟が行ったそうです。弟が兄を葬った後、蘭州に行き、朱少良という当時の西北長官だった人に会いました。今の言葉で言うと、省の主席にあたります。彼（朱少良）は中央を代表し、トゥブシンバヤルの郡王を弟に授けます。弟に群王の地位を相続させます。防衛司令官を同じく彼に相続させます。そのようになりました。この時期はちょうど抗日戦争が一番激しい時期でした。軍属からみると、ここは西北軍区に属します。当時の第八戦区でしたか。第何戦区だったかな。本来、第一戦区、第二戦区というように多くの戦区に分かれていました。朱少良の軍区、この青海・甘肅軍区は第八戦区に属していたか。どの戦区に属していたでしょうか。エジネーはこの戦区に属していました。エジネーの軍事と政府はとても重要でした。エジネーは本当に後方の要地ですよ。実に大事な戦略要地ですよ。戦略的にとても重要なところでした。エジネーは南北と東西を結ぶ要地ですよ。この居延路は昔の重要な道路です。この旗は戦争の時になると、エジネーを守ることができれば、甘肅、新疆、河西、河西回廊を全部守れます。河西回廊を守ることができれば、青海、甘肅、新疆を全部守れます。エジネーを失えば、本当に考えただけでおそろしい結果になります。言いようがありません。こうした状況下で、すぐにルハワーンジャブ・ノインを郡王にし、本物の防衛司令部を設置します。今後はここに軍隊を駐屯させるそうです。以前は軍を駐屯させなかったのですが、今はこうなりました。わたしの父はルハワーンジャブについて蘭州に行き、朱少良と会い、ルハワーンジャブは官職をもらってきました。わたしの父は、防衛司令部が設置されたときから、なにかの長（軍需主任）になりましたよ。司令部の中にいくつかの処がありました。その中に軍事需要処というところがありました。

⁷ 清代の官職名。

わたしの父をその処の主任にさせました。この軍事需要処は何をすところかという、軍事用の銃、弾薬、衣服などを管理します。後に、1940年代になり、司令部の中で騎馬軍大隊を設置するとき、(わたしの父は)騎馬軍大隊の隊長になりました。この騎馬軍大隊は1946年にでき、隊長になった後すぐ、南京で開催された国民党大会第二次大会がありました。そこに父は国大代表として行きました。実は1946年に選挙が行われ、ルハーンジャブ・ノインが代表に選ばれたそうです。しかし、彼は行きませんでした。国民党のほうでは、1946年は蒋介石の60歳の記念です。ちょうど蒋介石の60歳のお祝いでした。抗日戦争も勝利しました。抗日戦争も終わりました。1946年に共産党と国民党が協議しましたが、失敗に終わりました。45年まで国共合作をしましたが、解散しました。46年になると、抗日戦争が終わり、国内の共産党とロシアの共産党とモンゴルの共産党が中国を共産化するか、それに反対するか、という重要な局面に直面していました。1946年に選挙を行い、実はルハーンジャブ・ノインが代表に選ばれました。しかし、ノインは行かず、旗に残り、代わりに、わたしの父とヌドン・メーレン⁸の2人を行かせました。わたしの父を代表にし、ヌドン・メーレンを在京代表として一緒に行かせました。エジネー旗には代表は一人だけだったそうです。ルハーンジャブを選びましたが、わたしの父を行かせましたよ。しかし、1946年に代表で行く前に、その年の夏6月にドゥンドゥブらと一緒に旗を代表し、モンゴルと協議するためにこのオボティーン・ハロールに1回行きました。その後、代表として(南京に)行きました。次の年の1947年か1948年に、ヌドン・メーレンが国大代表になり、わたしの父を立法委員にしました。そして、1949年に解放されました。当時は騎馬軍大隊の隊長で、解放後は防衛司令部を解体しました。騎馬軍大隊を公安大隊にしました。公安大隊には100人余りを残し、残りの人たち全部をそれぞれ家に戻しました。原因は国が解放されたからです。エジネーでは戦争が重要ではなくなりました。前の騎馬軍隊には40代の老人もいました。そのような年上の人たちを全員退役させ、家に帰らせました。元の300人の編制を減らし、中隊にしました。もとの軍隊は連隊でした。人を減らし、中隊にしましたが、肩書きは連隊のままでした。権力、官職、地位を変更しません。しかし、人数を減らしました。100余人と制限していて、1955年になると、その公安大隊を中国でなくしました。その代わり公安民警を設置しました。そうして、全国で公安大隊がなくなりました。地域にもなくなりました。普通の警察にしました。警察になってから、さらに人を減らし、40、50人しか残しませんでした。わたしの父もそのときに退役しました。父は1955年夏に退役し、バヤンノール盟の水利局に勤めました。退役した時、はじめ内モンゴルのフフホトにある社会主義学院の副院長に任命すると言ったそうです。フフホトにはそんな学校がありました。主に、国民党員、居残った改造すべき資本家、知識人、民主党派の党首、武装蜂起者たちなどの人たちに、国が何ヶ月か訓練させる学校でしたよ。在職しながら勉強し、政策を学

⁸ メーレンは清朝の官職名の一つ。本名はヌドンデルゲル。

んで戻る学校ですよ。そこは皆年取った人たちでした。そのような人たちの思想を変える学校でしたよ。呼び方には何何学院と言うか、中国人民政治協商会議と言うか、中国社会主義学院内モンゴル分校というように、名前は大学でした。しかし、勉強していたのは皆年寄りたち、つまり上層の人たちでした。わたしの父をその学校の副院長に任命しようとしたら、わたしの父は

「わたしは家から離れてそんなに遠くに行けません。わたしはもう年取りました。わたしにはたいした知識と学歴がありません。そのような知識人たちと偉い人たちのいる学校には行くことはできません」

と言ったそうです。生徒のなかには本当に師団長もおり、位の高い分隊長だった人もいます。そのなかに本当にいろんな人がいますよ。さらに知識人と言えば、大学の先生、教授のような人もいますよ。それで、そのようだから、わたしはこの仕事をできないと行かなかったそうです。仕方なく、バヤンノール盟水利局の副局長に任命したそうです。そのうえ、またいくつかの委員の仕事を受けたそうです。バヤンノール盟の何々委員会の委員（公署委員、行署委員会）か、もう一つ政治協商委員にしました。そのような委員をいくつかあげ、主に水利の仕事进行管理していました。そのようでしたが、文化大革命で吊るし上げられて、1974年に病気で亡くなりました。その時、わたしも労働改造所にいました。父の亡くなったことを見ていません。わたしが労働改造所に入って7年たった後、わたしの養父はそこで亡くなりました。わたしは1968年春の1月に入り、1974年に父が亡くなったときにすでに7年がたっていました。

文化大革命の時、わたしの父はとても吊るし上げられました。文化大革命の主要な目的は、党内の資本主義路線を歩んでいる権力者を吊り上げることでした。文化大革命の闘争の主な目標はそのような人たちを吊り上げることです。党员、党员の中でも権力者、資本主義の道を歩んでいる人たちに主に吊り上げます。わたしの父は権力者にされました。文学芸術の改革、教育の改革、3つを改革するそんな革命ですよ。実は、思想戦線の革命はよいことですよ。わたしの父は文化大革命で権力を奪った人になりました。革命委員会ができ、前の政治協商委員会、公署などが全部なくなりました。どこに行っても革命委員会だけです。党委員会と政府の区別はありません。全部を一緒にしました。一元化指導にしました。そのため、前の職員たちを何もさせることなく、養っていました。彼らを敵と言えば、敵ではありません、何の仕事もありません。給料をもらって横になるだけです。政治協商委員会、党委員会、政府などの多くの重複した行政機関が全部なくなりました。党と政府が一つになり、指導が一元化しました。エジネー旗では革命委員会以外、政治協商会議、人民大会、政府、旗委員会は全部ありません。これは文化大革命の内部で改革しているということです。そのため、多くの人びと、特に党外の人々には活躍する舞台がなくなりました。彼らはプロレタリア階級の革命家ではありません。そうでしょう。古い社会から雇用している人々、武装蜂起者たちですから、彼らを残して雇用している人たちですよ。当時の政策はそうだったため、あなたは給料をもらい、思想を改革す

るだけです。そんなことです。休んでいて、吊るし上げられていました。わたしの父は心臓病でした。心臓病が突然再発したので、なすすべもなく、死にました。父はまた高血圧でした。それで、脳充血になりました。朝起き、トイレに入った後、トイレから出て家に入れず、途中で、脳充血で倒れました。その後、意識不明のまま病院に2カ月入院していて亡くなったそうです。

わたしの父は辰年の人でした。この後にもらった嫁と同じ干支です。辰年です。13歳の差がある辰ですよ。2つの辰です。前の妻と同じ年の辰です。後の(妻)が13歳年下です。みんな辰年でしたよ。今も生きていたら辰年の人、辰巳午未申酉年ですよ、今年(2005年)。85歳、今いるならちょうど90歳ですよ。そう、合っています。亡くなる時、わたしはいませんでした。

——あなた自身のオーラルヒストリーを話しませんか？あなたのヒストリーを全然聞いていませんよ。3歳の時から始めて、あなた自身のオーラルヒストリーを話してくれませんか。

わたしは3歳まで自分の生まれた家にいました。わたしは今自分の実父を知りません。わたしの記憶にはありません。母を知っています。3歳の時、母はいました。しかし、わたしが何歳のときに父が亡くなったか、わたしよく知りません。全く覚えていません。わたしはただ、自分の生まれた家から養子に取られた家に来ていたことを覚えています。わたしを3歳の時にこの家にあげたそうです。それは数え年ですよ。今考えると、2歳だったかもしれません。数え年はヒー・ナス(数え年の意)で早く進みますから。生まれた時点で1歳、誕生日になると2歳になります。ウマの前に乗せてきました。その家のモンゴル・ゲルは入口の扉のかまちがとても高いでした。その上を歩いて入れなかったので、わたしを抱き上げて家の中に入れてよく覚えています。冬でした。とても厚い毛があるデール(民族衣装の意)を着て、来ていたことを覚えています。そのようでした。ウマの前に乗せて行っていたことを覚えています。ウマで、冬の寒い中、1頭のウマの前に乗せてむかっていた。それ以外は覚えていません。それで、3歳の時に養子に取られて、9歳の時、わたしは、当時のエジネー旗の国立小学校に入りました。当時の中華民国中央の教育委員会と蒙蔵委員会という二つの機関が出資し、エジネーに建てた国立の学校です。国立のため、学生の食費と衣服代を全部、中央教育部と蒙蔵委員会が出します。

この学校をいつ建てたかと言うと、トゥブシンバヤル・ノインが存命のときからと考えられます。実は誰が来ていたでしょうか。その大公新聞の記者であるファン・チャンジャンがエジネーに来た時、学校はありました。彼は1937年に来たようです。そうでしょう。1937年夏に来たでしょう。その時この学校はサイル・ツォンジにありました。デルゲル・メーレンという先生がいました。チンギス・ハーンの肖像を掛けて、授業をしていたそうです。学校はサイリ・チョンジにありました。学校がタブン・ソムに来たときに、わたしは学校に行きました。わたしは9歳の時に、1943年にこの学校に来ましたよ。わたしはタブン・ソムに来ました。小学校にいて、1948年になりました。1948年にな

ると、内地は全部解放されました。あの国民党の政府も南京にいられなくなりました。それで、全国が不安定になりました。先生の給料も来なくなりました。全国の教育を全部中央が手配していました。先生たちも同じです。その先生たちは一緒に行ってしまった。授業に来ません。全国でこうなっていますから。生きるか死ぬかの瀬戸際の危険な時期になっていました。国民党の政権が倒れそうになっています。共産党は全国を占領してきました。国民政府がありました。揺れはじめました。こんな状態になり、不安定になりました。学校の費用とか、食費代とか、先生の給料とか、学費など、全部なくなりました。それで、1948年にわたしたちのこの学校は中止になりました。わたしも学校をやめました。わたしは家に帰って家にいると、1949年9月に解放されましたよ。我がエジネーは平和裏に解放されました。解放された後、平和になったと思っていましたが、突然アカセ（新疆の地名）、フクセ（エジネーの地名）とチャイダムからオスマンの強盗としてカザフの強盗がやってきて、みんなを騒がせましたよ。これは1949年秋にはじまりました。

アカセ・フクセという場所がありますよね。アカセ、フクセ、アノンバルと言います。アカセ、フクセ、アノンバル、チャイダムなどの場所をカザフは激しく攻撃しました。そこには牧畜民たちがいましたよ。国民党政権が倒れて、軍隊がなくなりました。共産党の政権もできたばかりでした。こうした不安定な時期にカザフ人の強盗たちが現われました。主な強盗と言えば、オスマンの強盗と言います。このオスマン強盗というのは、新疆とつながっています。主な人びと、主な民族はカザフ人です。そのなかに他の民族もいます。強盗をしながらやってきて、我が旗を強盗し、とても騒がせました。それで、わたしは1949年から勉強することができなくなりました。1950年でもできませんでした。その上、1950年にこのゴイズ⁹に徳王の亡命政府と徳王の亡命軍隊というか、なんと呼ぶか、彼らがゴイズにいて、投降しました。エジネーで強盗をしませんでした。そして1950年春に投降しました。その時、チャハル連隊長は200人の軍人を連れていて、投降しませんでした。その200人の連隊は強盗になり、マーゾンに行き、安西、敦煌、エジネーの間を徘徊して、200中100余りの人がここで壊滅されました。投降する者は投降しました。殺される者は殺されました。それで、100に満たない人たちは、戻って、東北に戻り、そこに着いてから、投降するのは投降し、殺されるのは殺され、終わりました。1949年から1950年まで、ここでも戦争があったことになります。わたしは学校に通えませんでした。1950年冬から少し安定しました。エジネーで何をするのか。わたしは本来小学校の5年生になるはずですが。わたしはその国立小学校があるときに、すでに4年生を卒業しましたよ。しかし、漢語で勉強したので、実はそんなレベルに達していません。しかし、数学は4年生を卒業していました。当時、もう一つの小学校がありました。旗が建てた小学校ですよ。それは1950年に再開しました。わたしは元の国立学校の人です。漢語で勉強していました。わたしはモンゴル語をちょ

⁹ エジネー旗ントゴル・ソムの地名。

っとだけ分かります。よくありません。しかし、数学などは全部分かります。全部できます。わたしはモンゴル文字を少し勉強するためではなかったら、このように旗のモンゴル学校に通う必要はありません。漢語をできなければ本当にダメだから、わたしはさらに漢語を勉強した方がよいと思っていました。わたしが漢語を学ぶには、ある程度の基礎があります。国民党の小学校で勉強しましたので。モンゴル文字をわたしは家で勉強しました。学校でも、少し暇なときに独学しました。それで、わたしはバヤンホトに行って5年生になると、アラシャー旗のモンゴル小学校に1950年冬に行きました。バヤンホトに着くと、学校は休みでした。1951年春からわたしはやっと5年生になりました。

1951年春、バヤンホトでアラシャー旗のモンゴル小学校の5年生クラスで勉強し、1952年に小学校を卒業しました。5年生を卒業すれば、小学校を卒業したことになります。卒業後、3ヶ月の教師資格訓練班というものがはじまりました。政府にいる一部の秘書たち（古い時代の政府の秘書たちです）、そして草原のソム、バグの秘書たち、全部20代、30代のモンゴル文字を書ける一部の若者を集めて、クラスを開きました。その中にわたしを入れました。あなたは小学校を卒業した人だから、入れと言われ、入りました。それをアラシャー左旗ではじめました。ここで3ヶ月学んで教師になります。教師を訓練する、教師資格班と言います。このクラスで3ヶ月勉強したら、各ソムに派遣し、小学校を建て、小学校の教師として派遣します。そのクラスでまた3ヶ月勉強しました。3ヶ月勉強した後、どうするかと言うと、この人はアラシャーの人ではありません。エジネーの子供ですよ。これをどうしようか。教育局も気が付かなかったでしょうか。この外地の子供をどうしようか。両親もここにいません。この子も小学校を卒業し、そのうえ3ヶ月の教師資格訓練という国の援助で勉強しました。この子はエジネーの子供です。よそのバグに行かせ、誰が責任を取れるか。年はたった18歳みたいです。さらに勉強させるなら、とても将来性がある子だとしていたとき、寧夏で民族学校が建てられるそうです。学生を募集する通知を張り出しています。それで、アラシャーの人びとは申請しています。わたしの教師資格班のなかからも21、22歳の一部の若者が申請しています。わたしも小学校の教師になりません。それで教師になりませんでした。その後に寧夏省民族学校が建てられました。当時、寧夏ではなくて、ヤラゲ（銀川）省と言いました。エジネーとアラシャーの2つの旗はヤラゲ省に属していました。ヤラゲ省民族学校ができ、わたしはそこに入りました。そこで2年勉強し、意味としては中学校進学にあたります。それは中学校に入ったことになります。その民族学校には3つのクラスがありました。一つが中学校クラスです。もう一つが獣医クラスです。それ以外にもう一つの幹部訓練クラスがあります。この訓練班は1年だけ勉強すれば、終わるものでした。幹部訓練班とは、皆職場にいる幹部たちのうち、政策のレベルや知識のレベルが低い者を1年でレベルアップさせるクラスです。工人農民の幹部を訓練するクラスです。彼らも職場から来て勉強しています。給料は自分の地域からもらって、ここで勉強していました。わたしはその中学校クラスにいました。それを文化クラスと言います。その中学校のクラスに入ると、教養を学びます。この人たちを将来、

順番に国の正規学校に行かせます。中学校クラスを卒業すれば、専門技術のクラスか、さらに高等技術の学校か、どこかに行かせるようです。獣医クラスなら3年勉強してから出て行きます。そして、獣医になります。それは中等専門技術クラスのような、獣医クラスです。このような3つのクラスがありました。わたしはここで勉強して2年たちました。中学校の2年生になったという意味です。その時に寧夏省を廃止します。甘肅省と合併させ一つの省にします。それで、この民族学校もなくなります。それで、どうするかと言うと、2年生になったわたしたちを連れて、西北民族学院に送り、その各クラスに編入させられましたよ。幹部訓練クラスは1年で終了します。卒業して、出て行きます。獣医班もあと1年です。もう2年になりましたので、あと1年で卒業して出て行かせます。この2つのクラスが残りました。そうして、学校を廃校させました。わたしたちの中学校クラス、つまり文化クラスをあちこちに分けました。年取った人や30すぎたこのような学生たちの一部を幹部訓練クラスに入れ、一部分を獣医クラスに入れ、20数人のモンゴル学生、みんな若くて、まだ30歳になっていない、22、23歳以上、25歳以下のこのような若者たちをみな西北民族学院に試験を免除して直接送りましたよ。到着した後、本人たちの教養レベルをみて、当時の学校の各クラスに入れました。予科班に入れるか、あるいは中等専門技術班に入れるか。状況を見て入れました。

これは54年末のことです。すでに1954年12月になっていました。学校が休みのところです。もうすぐ1955年になりますよ。わたしたちはそこに着きました。まもなくして、10日たったかどうかで、冬休みになりました。学校が休みになって、どうするかと言うと、家に帰って行く人もいました。翌年の1955年春3月に学校がはじまると、わたしを当時の師範科に分け、教師クラスに入れました。それは中等師範専門技術クラスです。わたしと一緒に4人をそこに入れました。他の人たちを政治科と法律科に入れました。専門技術クラス（大学程度の専門学校クラス）に相当します。一部の人たちを何というものでしたか、文芸部というのか、そこに入れました。後に歌や踊りの仕事をします。もう一つは何でしたか。鉄道クラスというのでしょうか、そんなクラスもありました。そのように分けました。主に、漢語で勉強できる人たちを漢語で授業するクラスに入れました。政治科と法律科は全部漢語で授業をします。漢語でついていけるなら、そのクラスについていかせます。わたしは師範科に入りました。そして、1957年7月に卒業しました。

そこを出て、1年教師をしました。エジネーに来て1年近く小学校の教師になりました。当時の旗政府はサイハントレーにありましたよ。小学校の教師になりました。小学校の教師になって1年半たったかどうかくらいで、旗にラジオ局が設立されました。それで、わたしはその放送局に入りましたよ。旗の放送局のアナウンサーとして入りました。給料がでます。わたしは正式な学校を卒業し、派遣された学生ですよ。途中から仕事を得た人ではありません。学校卒業後、給料が出ていますよ。当時の給料はとても低かったです。月給は42元しかありません。それで、ラジオ放送局に数年勤めました。勤めましたが、ラジオ放送局には電気が通っていません。旗には長期に発電できる設備があ

りません。そこにいたとき、1 台のディーゼルエンジンで、夜に照明用の電気を供給していました。それで、夕方に少し放送していました。日中は放送がありません。朝もありません。サイハントレーイにいるときも夜だけ放送します。夜に 1, 2 時間だけ放送します。ここドライブに来てから、機関がとて多くなりました。その小さいディーゼルエンジンでは、ドライブ鎮全体のすべての機関の照明用電気を供給できません。それで、このディーゼルエンジンを郵便局にあげました。郵便局はこれをもってから、郵便局では日夜問わず、電報を送ります。旗では麻灯を使います。ラジオ放送局も電気がないため、必要がなくなりました。その上、設備などいろいろ面で問題があり、設備が揃っていないので仕方ありません。何もありません。放送するようなニュースもありません。電気もないので仕方ありません。しかも、わたし 1 人だけでしたよ。他の人はいません。放送局を建てました。しかし、放送設備、拡声器のようないくつかの機械だけです。またいくつかの高音ラッパがあります。このようなものです。他のものは何もありません。1 台の発電機を旗の郵便局にあげてしまいました。旗もここに来てからとても大きくなりました。サイハントレーイにいるときは少数の機関しかなかったのが、今はとても多くの機関と広い土地があります。しかし、長期に供給できる電気がありません。それで、わたしを異動させ、映画隊に入れました。わたしは映画隊で何するかというと、人口でチケットを回収します、每晚映画を映します。映画隊には自分たちのガソリンの発電機があります。夕方になると発電して映画を上映します。わたしはその映画を映す技術を知りませんよ。わたしはそれを学んでいません。どうするかというと、入口に座ってチケットを回収します。チケットを売ります。日中は何もしません。

1962 年から 1965 年まで映画隊で働きました。それで、65 年からか 64 年になってからか、わたしに無実な罪が着せられました。他の人がわたしを公安局に無実な罪で訴えました。無実でこのソルマージャブと言う人はツェリンダライという人の家で酒を飲んでいて、酒が入った杯を持って、

「蔣（介石）委員長万歳」

と全員で乾杯した、と訴えられました。映画隊にいるとき、一緒に働いていたチュウ・ウェン・ユエンという人がいました。この人はお金を少し着服しました。わたしはそれを訴えました。チュウ・ウェン・ユエンという漢族の老人がいます。彼は映画を映す人です。この人は一部のお金を帳簿に記しませんでした。販売したチケット代と納めたお金の間に差額が出ますよね。計算すると、差額の 30 余元をこの人が着服しました。これを帳簿に記していません。わたしはチケットを販売し、お金を納めますよね。販売したチケットの控えをわたしは保存しています。販売したチケットのお金をこのチュウ・ウェン・ユエンに納めます。チュウ・ウェン・ユエンは会計です。チケットの控えと納めた金を照らし合わせると、30 余元が足りませんでした。それで、チュウ・ウェン・ユエンをこの事情で訴えないわけにはいきません。そのうえ、共産主義青年団から除籍されたかどうか分かりませんが、着服したので会計を辞めさせられました。このようなことがありました。1964 年には、この人は映

画を映す仕事をしていました。こいつは、このことからわたしに恨みがありました。わたしを恨みました。1965年、わたしは盟（人民政府所在地）に3ヶ月の映画を映す訓練クラスに行きました。わたしが行った後、公安局にそのような訴えを出しましたよ。

「ソルマージャブは誰誰とツェリンダライの家でナムブラ、エリデンビリグ、ツェリンダライと酒を飲んでいて、1964年秋、10月1日の祝日にツェリンダライの家で酒を飲んでいて、『蔣委員長万歳』と叫んで乾杯した」

と訴えました。そうです。当時の公安（局）が

「これは大変な階級闘争の表れだ」

と、わたしを公安局に記録しました。それで、このことについて調査をしました。調査して、ツェリンダライ、エリデンビリグ、ナムブラに聞くと、

「あなたたちは1964年10月に酒を飲んだことがありましたか」

と聞きます。

「ソルマージャブは何を言いましたか」

という、

「いいえ、知りません。何かを言っていました。何を話していたのか覚えていません」

それで終わります。

「ソルマージャブは『蔣委員長万歳』と叫んだか」

と公安局は詰問しません。何々と言ったかと繰り返し、調べ、ツェリンダライの妻ユム老人にこのように聞きます。彼らは

「誰が覚えていますか。わたしは覚えていません。人びとが騒いで飲んでいたので、わたしは何を言ったと言えますか」

主に「蔣委員長万歳」と叫んだかどうか。「フルシチョフ万歳」と叫んだかどうかを照らし合わせていました。何度も調べて、彼らを驚かせていました。真偽を見分けられません。わたしの無実の罪を晴らしません。ウソの訴えを取り下げません。保管書類にして保存していました。それで、わたしの行動を観察し続けていました。彼らも放っておきません。このことが正しく解決されないままにいるうちに、文化大革命がはじまりました。文化大革命が来ると、大字報が出ました。大字報が出て、

「ソルマージャブは反動的スローガンを叫んだ」

と、こんな話を聞いた別の人が大字報を出しました。こうなったら、わたしを

「この人は幹部陣営にはいけません。容疑者、現行の反革命行動がある者と言える者でしょう」として、わたしを草原に行かせました。そうでなければ、わたしを五七農場に行かせ、強制労働させました。農場に行った後、このことについて再び調査し、チュウ・ウエン・ユエンに聞き取りしました。あなたの告発したことを調べてみると、どうしても真実が見つかりません。そばにいた人たちに

「一緒に酒を飲みましたか」

と聞くと、

「飲んだ」

と言っています。これをみんな保証します。

「何を言ったか」

と聞くと、彼らは

「そんなことを言った」

とは言いません。どうしようかと聞くと、あのチュウ・ウェン・ユエンは

「ああ、彼らは何を言うのでしょうか。言うはずがありません。彼らは皆一つのグループの人たちです。そのときだけではなく、いつも一緒に酒を飲んでいたグループです。一つ日は、彼らは一つのグループです。彼らが言うはずがないでしょう。一つの理由です。二つ日は、そんな言葉を言った、と今言ったら、これは2、3年も罪をかばった罪人になります。ですから、今は言ってはいけません。そうでしょう。わたしは今、すでに告発し、訴えました。このことをずっと前に告発しました。彼らは本来、自分で告発しなくてはなりません。しかし、彼らが告発していなかったのは間違いです。わたしが告発し、それがすでに大字報で出ました。そのため、彼らはもっと恐れ、言葉を合わせ、もっと親しいグループになりました。そうでしょう。今は、水を撒いても通らない、針を刺しても人ならないようなグループになりました。今、彼らは死んでも言いません」

と言ったそうです。そしたら、彼らは

「それはそうです」

として、わたしに無実な罪を着せました。それでわたしは、1968年から正式に刑務所に入りました。わたしの出身階級と言えば、父は国民党の代表（国大代表）になった人です。わたしの父は、上の席に座り、ごちそうを食べ、蒋介石と2回も会って、握手した人です。出身した階級と家族から見ると、革命の陣営にいてはいけない人になりました。政治の方面でも信頼できません。こうなるはずです。当時は家族の出身を登録し、階級を分けました。文化大革命では、出身階級を分けました。搾取階級と信頼できる階級の二つに分けました。敵とされる人が多くなりました。

出身を分けるとき、わたしは出身家庭で牧主になりました。家族の出身はそうでしょう。父は国民党軍隊の少佐大隊長、国民党大会の代表（国大代表）、立法委員になり、国民党人民大会に参加していました。現在で言うと、全国人民代表大会の代表になっていたことになります。わたしの父は当時。しかも、蒋介石と国民党は台湾に拠点を置いていましたから。いつか大陸に反撃しようと準備しています。こうした状況の下、のちに内人党、トルゴード人民党という罪名もかぶりました。トルゴード人民党とは国を裏切ろうとした党ですよ。このように、わたしに恨みがある人たちはわたしに多くの害を与えました。ソルマージャブはラクダと鞍を準備し、ハルハに逃げようとしていたそうです。何々

すると、いろいろ言われました。わたしが刑務所に入った後、自由に作り話をしていました。すぐ作ります。わたしと仲良かった人たちのところに行って害を与えていました。ああ、彼らは以前にソルマージャブと仲良かった人たちです。飲み食いの仲間たちでしたよね。そうでしょう。このようにわたしと仲良かった人たちに圧力をかけます。ナムブラ、ソドノムジャムチャ、バルザルなど彼らのところに行って、このように圧力をかけるそうです。やつらは。文化大革命の時はこのようです。

「彼らに彼を告発しろ」

と言うそうです。

「おまえは今、ソルマージャブの罪を告発しろ」

と責めます。わたしを捕まえても罪と言えるモノはありません。一言スローガンを叫んだだけでは足りません。それで、わたしと仲良かった人たちをこのように責めていたのでしょう。

「あなたたちは見たでしょう。ソルマージャブは大字報に出ました。『蔣委員長万歳』、『フルシチョフ万歳』というスローガンを叫びました。あなたたちはそんな人と仲良かったでしょう。あなたたちはソルマージャブのことについて未だ告発していません。それは間違いです」

と彼らを責めます。それで、ソドノムジャムチャ、バルジャルがウソをつきはじめました。

「ああ、そいつは『ハルハへ逃げる』とわたしに1回言ったことがあります。『わたしはハルハに行きます。わたしは「蔣委員長万歳」、「フルシチョフ万歳」と叫んだので、わたしを捕まえようとしています。わたしは今からハルハに行きます』と、わたしにそのように酒を飲んで言っていました」

と嘘をついていました。そしたら、

「よしよし」

と言うのでした。このようにして、5、6人から嘘の証言を出させ、わたしを1970年4月まで2、3年閉じ込めました。わたしは刑務所でそれらの嘘の告発を全く認めていませんでした。そんなことはないのに、わたしはどうやって認めますか。

わたしは刑務所に1968年1月から1970年4月までいました。しかし、わたしを刑務所に入れましたが、罪を判定できませんでした。人はこうこうと嘘をつけば、よしと言って、言った言葉を記録し、ここに指紋を押せと。すると彼らは指紋を押しましたよ。それらが全部わたしを告発した資料になります。チュウ・ウェン・ユエンが妻とまた告発します。その妻も入っていましたよ。妻と2人で言っています。

「わたしを会計の職から外した。こいつは」

と夫婦の2人は力を合わせて、わたしを訴えていましたよ。

「そのツェリンドライの家で酒を飲んでいたときに乾杯したことを、あなたたちは庇っている」
と言っていました。2人だから力が強いですよ。当時は録音するモノはありません。そのため、一人

だけでは罪を判定するのが難しいです。しかし、2人なら何を言っても信じることができます。チュウ・ウェン・ユエン一人だけなら信じません。その後にバルジルとこのトブジャラゲルの2人が嘘をつきました。このトブジャルガルはわたしをととても苦しめた人ですよ。このトブジャルガルがした悪いことをわたしはよく知っていますよ。トブジャルガルは自分のした悪いことをわたしが告発するかもしれないと疑って、わたしに無実な罪を着せました。チュウ・ウェン・ユエンが妻と最初に告発しました。トブジャルガルが2番目に告発しました。トブジャルガルはチュウ・ウェン・ユエンの妻と関係を持っていて、振られた人です。はじめは、旗の宣伝部長と共産主義青年団書記でしたが、チュウ・ウェン・ユエンの妻とチョイムピルの妻の2人にすべてを奪われました。わたしはこのことよりもっと多くのことを知っています。わたしが刑務所に入る時、トブジャルガルは恐れていました。ソルマージャブは手柄を立て、罪を軽減するために、わたしを告発するかもしれないと恐れていました。刑務所はそのようなところです。あなたは自分の罪を提出します。他人の罪を知っているなら、告発して自分の罪を軽減します。あなたの手柄になります。そのため、わたしは知っている他人の犯した罪を告発します。どんな罪でも告発してよいです。賄賂か反革命か、なんでも告発してよいです。それで、トブジャルガルはおそらくわたしが彼を告発すると思い、その前に対策を講じようとしていました。彼はそのように考えていました。ソルマージャブを刑務所に入れ、殴ります。ソルマージャブは焦り、自分の知っている他人のことを全部言ってしまおうと考えました。それで、トブジャルガルはわたしについて嘘を言いました。1人目と2人目はチュウ・ウェン・ユエンと妻の二人で、トブジャルガルは3人目、ソドノムジャムチャは4人目、バルジルは5人目、アムルジャルガルは6人目です。この6人が力を合わせて、話しを合わせました。それで、(わたしを)告発した人が6人になりました。わたしは3年刑務所にいて、罪を認めなかったので、外からわたしを恨んでいた人や嫉妬していた人がどんどん加わって、無実な罪を加えていきました。彼らは、ソルマージャブに必ず危害を与えようと嘘を加えていました。これをわたしは知りませんでした。わたしは刑務所の中で何も知りませんでした。3年たってから、わたしを正式に刑務所に入れることになりました。はじめは、わたしを拘留していました。3年あったある朝、突然入ってきて、一つのベッドを作りました。床にベッドを作った後、わたしを連れて行きました。連れて行って、法廷に着きました。法廷に着くと、手に手錠をかけられました。

「あなたは聞きなさい」

と言いました。わたしの罪を公布すると、なんと「蔣委員長万歳」、「フルシチョフ万歳」を叫んだこと、ハルハに行くとしたこと、ラクダと鞍を準備したこともあります。文化大革命がはじまると、2つの階級闘争がはじまりました。本当にいろんなことを言いましたよ。

「あはは、その年のその夏、今春、その年の秋と、トブジャルガルに言った。バルジルに言った。ソドノムジャムチャに言った」

などたくさん罪でした。このように公布したので、こんなに多くの方がわたしに危害を与えていることを知りました。それでわたしはやっと知りましたよ。おしまいだ。最後に、

「あなたはこの処分にどんな意見がある」

と聞きました。

「全部嘘で作り話だ」

と言いました。

「そう、よいです。あなたは書いて」

と言いました。それでどうでしょうか。わたしは全部嘘とするので、彼は自分で記録しました。

「最後に名前を書いて」

と言います。

「わたしの言ったことを彼が記録した。わたしに名前を書かせようとしている」

と思い、上記のことをわたしは言ったとソルマージャブと名前を書き、何月何日とサインしました。そして、また言っていましたよ。

「あなたは上記の処分を受けたくなければ、エジネー旗の各委員会の保衛部に訴えてもよいです。または地方レベルの革命委員会の保衛部にも訴えてもよいです」

と言いました。それで、わたしは上級に冤罪を訴える文書を書きました。郵便局で門衛をしているリュウ・ファイというやつは、当時、刑務所の門衛でした。彼はわたしに大きな仇があります。嫌いだったので、冤罪を訴える文を書く紙を頼むと、このような1本のペンと2枚の紙しか持ってきません。わたしは冤罪を訴える文を書くため、1枚を下書きにします。また漢字を書けません。モンゴル文字で書いてはいけないそうです。はああ、2枚しか持ってきません。わたしは何を書けるでしょうか。1枚を下書きにすれば、残った1枚で書き切れません。ある字を書けません。書いたか、どうか、急がせました。それで、いくつかのことを書きました。紙は1枚しかありません。下書きの紙も残さず、全部持っていきました。

そのようでした。完全に閉じ込められていました。閉じ込められ、光を見ないので、眼が悪くなりました。外に出たら、まぶしいです。日中には刑務所に閉じ込めていたので、当然です。夜中に、ローソクの下で書こうとしたら、眼が眩しくて書けません。光を見られなくなりました。太陽を見ないで何年もたったら、そうなるでしょう。顔色も真っ白です。長期間、歯を磨けず、歯は真黄色になりました。どのぐらいだったでしょうか。わたしの冤罪を訴えた文書が無効とされました。わたしは酒泉に訴えましたが、それが却下されたという返信があったそうです。その返信をみると、どうでしょうか、偽物でしたよ。偽の、却下したという文書が来ました。わたしの冤罪を訴えた文書を酒泉にあげていませんでした。自分でニセの印章を押し、タイプライターで字を打ち、「ソルマージャブの訴え書を差し戻し、元の判決を支持する」と書き、元の判決文に酒泉の革命委員会の保衛部の印章が

ありました。その印章を見れば、偽物であることはすぐ分かります。さらに、わたしはいつ訴えを書いたか、年月を覚えています。わたしの書いた年月にも注意しなかったようです。日時まで変え、わたしが書いた日時と合わなくなりました。それで、わたしは思いましたよ。なかに、レン・ヨウコンという病院の漢人幹部がいました。彼も看守していました。それでわたしは彼に言いました。

「はああ、この人たちはわたしにこのように危害を与えています。そのうえ、わたしが訴えると、訴えた文を却下したという偽物を作って持ってきます。わたしの書いた文を送ってくれません。このことをどうしますか。わたしは今考えています。わたしは訴え文を書かない」と言いました。

「あなたが書かなければ、自分の罪を認めたことになります」と言いました。しかし、訴えても送ってくれないので、わたしはどうしましょうか。それでいろいろ考えました。そのようにして時間が経ちました。1960年代以来、多くの人たちが刑務所に閉じ込められ、結果が出ないまま、死んでしまいました。病死します。餓死します。わたしはもうすでに3年閉じ込められました。今どうしますか。今は訴えを送ってくれません。のちの朝、ジャン・ファいう人がこう言いましたよ。彼は元警察でした。わたしの兄は彼と一緒に職場でした。公安民警でした。彼は言いましたよ。

「あなたはまだ若者です。あなたは今行って、わたしはあなたに言います。今は、中国とソ連は戦争の準備をしていて、本当に今日か明日に戦争する状態になっていますよ。あなたは知っているでしょう。外に軍事の堡塁を建てていて、中ソの国境がこのような緊張状態になっているので、本当に戦争になったら、あなたたち全員殺します。この中で閉じ込めている人たちなら仕方ありません。あなたたちを釈放する可能性はありません。処分を判定しようにも、罪をまだ認めていません。認めないのでみんな一緒にいますよ。たくさんの方がいますよ。出る人は皆出ましたよ。まだ20、30余人がいます。処分してはいけません。わたしと同じく、何年もたった人もいます。全く認めず、対抗しています。こんなに多くの告発文があり、多くの告発した資料がある人たちですから、認めても認めなくても、このように処分を判定します。処分を受けて行くなら行き、行かなければここに残り、戦争になれば、皆殺します。他の方法はありません。これは全部真理です。そのため、あなたは出なさい。もうすべてが決まっているので、訴えても意味ありません。こういうことです。あなたを助けるために言っていますよ。訴えることはいつでもできますよ」と言いました。ああ、この言葉がわたしに一つの方法を教えてくださいました。実は上の処分判決書ももらってから、訴えるなら10日以内に訴えます。そんな規則があります。しかし、わたしにはそんな制限はありません。何日という日数など、何もありません。あなたが上記の処分判定を受けなければ、エジネー旗の革命委員会の保衛部、あるいは、上の酒泉地域レベルの革命委員会の保衛部に訴えてもよいとしています。10日間以内、7日間以内という日数の制限はありません。ああ、よう

やく納得し、本当にそのようにしました。わたしは出ます。それで、彼らは

「あなたは訴えるか否か」

と聞きました。わたしは

「もう訴えない」

と言いました。

「そしたら、あなたを労働改造のところに送ります。あなたは社会主義の大建設に力を貢献しろ」と言いました。

「あなたは労働改造のところにいき、手柄を立て、罪を償いなさい」

と言われました。それで、訴えませんでしたので、労働改造のところに行かせました。

それで数年行きました。1971年6月に行きました。甘肅の天祝チベット族自治州に行きました。武威の手前の山にあります。その時、我がエジネーは甘肅省に属されていました。それで、その天祝県の石膏鉱山に行きました。鉱山と言っていますが、実は労働改造所です。石膏とは人の骨が折れたとき貼るものです。石を掘ります。じゃあ、そこで何年たったかということと9年半になりました。71年に行き、79年4月に出てきましたよ。9年になったでしょうか。いえ、8年です。と言っても、69年にまだなっていない。68年1月に入りました。そこに3年余りいました。68、69、70、71年です。わたしは71年6月中旬に行きました。ですから、そこに8年いて、4年余り刑務所にいましたよ。刑務所で罪を認めなかったのも、そんなに長く閉じ込まれましたよ。

刑務所を出てから、労働改造所にいた間、たびたび訴えをおこしました。そうすると、却下されませんでした。何の消息もありません。そして、78年になり、中央からこのような指示が出ましたよ。1958年以降に起きた政治事件をもう一度調べなさい、という指示が出されました。刑事事件ではなく、全部政治事件です。このなかには、1958年の右翼派たちも含まれています。刑事犯罪は含まれません。もっぱら政治事件をもう一度審査します。エジネーから公安局の人が行きます。公安局の人がソルマージャブのところに行くと、ひと騒動でした。公安局の人が言ったことは全部わたしに反論されます。わたしは十分な準備しましたので、わたしをどこから攻めても勝てませんでした。わたしは労働改造に8年行きました。辞書を読みました。法律を学びました。哲学もわたしは勉強しました。毛沢東の「矛盾論」と「実践論」という文章を読みました。また、毛沢東の「人の正しい思想はどこから来ているか」という作文を読みました。そして、レーニンの何でしたか、唯物主義と経験批判主義という文、唯物主義哲学という文章もわたしはすべて読みました。哲学を学んだわたしと話すということは大変ですよ。労働改造のところに審査しに来た時、わたしは本当に言いましたよ。はや、当時、わたしは45歳の時、賢く、言葉も鋭かったです。当時、賢く、意欲に満ち溢れていました。彼らはわたしに反駁されました。時々皆わたしが言った言葉を記録していました。それで彼らも理解しました。わたしたちがそのとき、こんな愚かなことをしていることを知りました。彼らもまた8、9

年過ぎた後、わたしのたびたびの訴えを見ていましたよ。彼らが見てから、考えましたよ。考えないのではなく、考えていましたよ。実は、専門技術（の学校）を卒業した幹部です。この人たちが再び審査しました。ちょうどよかったです。わたしが労働改造所に行ったのち、トブジャルガルは終わりました。あのソドノムジャムチャも終わりました。わたしに無実な罪を着せた人たちは、わたしが行った後、みんな文化大革命でやられましたよ。このバルジルとソドノムジャムチャの二人を吊るし上げ、頭を上げさせなかったそうです。わたしに冤罪を着せたことで、仕方なかったようです。なぜかと言うと、あなたたちは以前に反革命者ソルマージャブと結託していました。あなたたちははじめ、ソルマージャブを告発しませんでした。のちに、ようやく告発しました。実は、政治方面で、思想方面で、あなたたちは反革命者ソルマージャブと一つのズボンをはき、一つの鼻で息をしていた人びとです。あなたたちは今罪を認め、彼を告発したので、あなたたちを許しています。そうではなければ、あなたたちにも罪がないではありません。どんな罪かと言うと、反革命者をかばって、数年後に罪を告発しました。これは実に間違いです。罪としました。彼らはこのようにわたしを抑え、出世させないようにしました。

（以下、次号に続く）

2005年5月1日午前エジネー旗で聞き取りした。

聞き手：サラングゲル、アラタンツェツェグ、兎玉香菜子

謝辞

本稿は「水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史の変遷（代表・中尾正義、通称オアシスプロジェクト、2001年～2006年）」と「牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究（科研費（21221011）基盤研究（S）、研究代表者・嶋田義仁・名古屋大学教授）」の研究成果の一部である。ソルマージャブさんに心よりお礼を申し上げる。

（なむら・千葉大学文学部外国人研究者／さらんげれる・中央民族大学蒙語系／
こだま かなこ・千葉大学文学部）

An oral history of Mr. Sormajav in the Ejene district, Inner Mongolia (Part 1)

Namula, Sarengerile and KODAMA Kanako

Summary:

This oral history was provided by Mr. Sormajav (1934, born in Ejene) on May 1st, 2005. Here, Mr. Sormajav describes his life, his adoptive parents and his grandfather. He refers to his adoptive father's various experiences, including educational experiences in Mongolia, moving across the border between China and Mongolia, and having met with Chiang Kai-shek (Jiang Jie Shi) as representative of the Ejene district. In addition, it portrays the extent of the change that occurred, especially since establishment of the People's Republic of China. As a youth, Mr. Sormajav went to school before the Communist Party was established, and whoever had received higher education was viewed by society as an intellectual and thus had to spend their "youth" as criminals in a prison and forced labor camp for ten or more years due to the Cultural Revolution. How was his experience of the hardship in prison and the labor camp? How did he clear himself of the false charges? He describes how the false charges were made and his hard experiences in vivid detail. This account represents the social history of the minority area near the border of China in the 20th century.

